

モリー・ブルームの愛と性—『ユリシーズ』第十八挿話

片岡 洋子

(平成5年9月30日受理)

Molly Bloom's Love and Sexuality—*Ulysses*: Episode 18

Yoko KATAOKA

(Received September 30, 1993)

1. 主婦、歌手、愛人

『ユリシーズ』第十八挿話は、レオポルド・ブルームの妻（マリオン通称モリー）が語る彼女自身をヒロインとする不倫物語である。それは一九〇四年六月十七日早朝、ベッドに横たわるモリーの変幻自在なモノローグが織りなす幻想のPornoグラフィでもあり、同時にそれは複数の異なる角度から眺められた断片的イメージの集合体としての自画像を提供している。

ホーマーは『オデュッセイ』においてペネロピを、ユリシーズの二十年に及ぶ不在の間求婚者たちを寄せつけず、無言のまゝ機を織り続ける貞節な妻として描いたが、現代のペネロピであるモリーは飽くことなく伸びやかに語り続け、また第十七挿話の終りでは、二十五人に及ぶ彼女の愛人のリストがブルームにより口述される（実際には、二、三人を除いてブルームの嫉妬心から生じたものである）。モリーの自由気儘な想像力から生み出された「意識の流れ」を通して頭わにされるのは、主として彼女の愛と性をめぐる複雑な情念の絡み合いであり、また不安定で変り易く、脆く傷つき易い自己の姿である。

モリーは三十二歳になるダブリンの中産階級の主婦であり、地方で修業中の十五歳になる一人娘の母親でもある。中年太りを気にし、痩せ薬や化粧品で容貌の衰えをカバーしようとし、魅力ある女性としての三十五歳限界説を信じて、その年齢迄あと何年残っているかをしばしば計算する（そしてよく間違ふ）。また歌手としてのキャリアを持ち、当時のアイルランドでは数少ない職業婦人

教養部 英語第三研究室

であり、マネージャーのブレイゼズ・ボイルンは彼女の最近の愛人でもある。

六月十六日におけるモリーの最も重要な行為はボイルンと情事をもつことであり、これは『ユリシーズ』におけるプロットの土台となるものの一つである。訪ねてくる愛人のために家具を移動し、自身の体を美しくするために多くの時間を費やしてきたが、家事を行うモリーについて我々はほとんど読むことはない。彼女の大部分の行為は、直接又は間接的に「性」と関連している、と言えるであろう。

『ユリシーズ』を一貫して音楽がしばしば「性」と結びついているように、モリーにおける音楽はほゞ常に彼女の性的な性向へと結びつく。舞台上歌う時の彼女の表情は、「ここで目を閉じる息をする唇をさしだしてキス悲しげな表情目をあけて弱く…」と述べられるように官能的であり、また男性歌手と歌う時は、必ず相手との「戯れ」がそのコンサートに付きまとう。サイモン・ディーンダラスは、「いつも言い寄って来たフレディ・メアーズの素人オペラでマリターナと一緒に歌った時はあの人はふるいつきたいほど見事な声をしていた」のであり、またパーテル・ダーシーについては、「（彼も）あたしがグノーのアヴェ・マリアを歌った後で聖歌隊の方へ通じる階段であたしにキスし始めたなにもぐずぐずすることはないわおゝわたしの恋人よ顔のところにキスしてよ」と、モリーは語る。

ボイルンと一緒に歌うことは、モリーにとって当然彼との情事を意味するのであり、彼女はその二つを時々無意識に結びつける。

彼は牡蠣を何ダースも食べたに違いないわまるで歌

ような大声であたしを素晴らしく感じさせていっぱい満たしてくれた人は生まれて初めて彼はきつと後で羊を丸ごと一頭食べたでしょう… (611頁)

モリーがベルファストでの次の公演を考える時、そのやり方について関心を示すことはなく、空想することはもっぱら汽車の中での情事、彼女へのプレゼントをボイルンと一緒に買うこと、そしてそのまゝ駆け落ちすることである。モリーが音楽会で歌ったのは「一年以上も前」のことであり、プロの歌手としてのキャリアを積むことに関心を抱くことはなく、彼女にとって歌手であることは、愛人としての彼女の存在を支える能力に他ならない。モリーにとって性は生の推進力ともいべきものであり、彼女はもっぱら官能的魅力によって男性を惹きつけることができると認識する。ジョイスは性愛をその他の種類の愛よりも上位においており⁽⁴⁾、モリーを主として知性、教養が十分とは言えない、直観的な性的存在として描いている、と言えるであろう

『ユリシーズ』は部分的には十六年間の結婚生活を経て、今や中年の危機に入った夫と妻の関係の質についての研究である。生後十一日目で亡くなった息子ルーディの死の五週間前、つまり結婚五年後に彼らの完全な夫婦関係は終っており、また娘が九カ月前に女性として成熟した時期に達したことは、夫婦間の精神的交流にも少なからぬ隙間を生じたことと推測される。愛人ボイルンとの関係の背後には、キャリアウーマンとして生きることへの挫折感のみならず、そのようなモリーの欲求不満が隠されてあるのは言うまでもない。

六月十六日午後モリーはボイルンとの間に、夫ブルームとの夫婦関係が途絶えた後の過去十年半において初めて完全な肉体関係をもつに至る。十九世紀感傷小説のスタイルで述べられるモリーのモノローグでは、無意識の喜びのみならず、若さと愛を失うことへの不安と恐れが顕わにされる。

あたしがひどく望んでいたものを与えてくれあたしを元気づけてくれる人がいるのはありがたいことだわ…嘘であろうと真であろうと恋というものは一日全てと全生涯を満たしいつも何かを考えさせそしてまわりの全てを新世界のように見えさせるのだわあたしのことを考えさせるために返事を書こうかしら…でも女なんて年をとると忽ち男に灰置場の底に投げ

棄てられてしまうんだから… (624頁)

またモリーはボイルンの逞しい精力は認めても、女性に対する粗野で品のない振る舞いには我慢がならない。ボイルンはサディスティックで自己中心的な男のステレオタイプとして描かれており、モリーとの情事は彼にとって快楽の一つにすぎず、性欲を満たした後は相手の腰をビジャリと叩いて退けるのであり、彼女に対して優しさや細やかな愛情を示すことはない。「彼はお金持だが結婚すべき相手じゃない」と彼女は思う。ボイルンとの関係はモリーに興奮、喜び、解放感を与えると同時に、不安、動揺を残し、また社会的モラルに挑戦する一方で、モリーは以然としてボイルンの満足の度合を気にし、好意を失いたくないと思っているのであり、それは彼女の限界を示すことになる。

一方、ここで注目すべきことは、ボイルンについてのモリーの思いが、若き日の恋人たちについての思い出同様、常にブルームへの意識でいっぱいであるということである。ボイルンと手を握り合い、歌いながら運河沿いを歩く時、「彼（ブルーム）はあたしと彼（ボイルン）との仲を疑っているわ彼だってそれほど馬鹿じゃないもの」とモリーは確信する。ブルームが午後早くに家を出たのは、自宅でのボイルンとの逢引を察知した上でのこと、とモリーは推測する。また長い熱烈なキスを望む時は、「彼（ブルーム）がそこにいる時誰でもそばにいる男があたしをとらえて腕に抱き締めてキスしてくれればいいと時々思うわ」と述べる。このような幻想で重要なことは、その行為の目撃者としてブルームが傍に存在する、ということである。モリーの午後の逢引も、むしろ夫によって「仕組まれた」ものと考えることができ、それはモリーの言葉「あたしが不義の女ならそれはみんな彼のせいだわ」が裏書きしている。ブルームが彼女を「用済みの廃物」とみなしているのではないか、という疑念は彼女に大きな不満を募らせる。十年半の間、妻として顧みられなかったことに不安と恐れを抱き、夫の性的無関心に刺激を与え、それを蘇生させようとするモリーの意志は彼女のモノローグを支配することになる。

モリーは彼女の不倫をもっぱらブルームのせいにし、次のように述べて不倫を一般化し、責任を免れようとする。

おゝ私たちがこの涙の谷でする罪惡がそれだけなら

大したことじゃないのは神様が御存知だわ誰でもそれをしてるんじゃないのただその人たちは隠しているだけなんだわ女がこの世にあるのはそのためだと思わそうでなければ神様は私たちを男にとってこんなに魅力的におつくりになることはないわ… (642頁)

モリーはボイルンとの情事は正しくブルームが望んだことであり、夫として婚姻の義務を怠ったことへの罪の償いであるとみなす。これは第十五挿話におけるベラ・コーヘンの営む娼家での幻想の中で、ボイルンにへつらう女衞役のブルームが、鍵穴からモリーとボイルンの行為を覗き見るマゾヒスティックな場面に重視するであろう。ここにはボイルンとの関係を夫に見せつけることにより、彼を覚醒させようとするモリー自身の欲望が顕わにされている。

情事後の解放感の中で、モリーは自由に「四文字語」を叫ぶ自身を想像するが、傍のボイルンに「醜くなったり、皺がよったりする顔」を見せたくないため、実際にそうすることはない。エドワード朝における伝統的性役割に反抗できるのも歪んだ幻想においてのみであり、感覚的喜悦にある時でさえ、モリーの意識は男性に対する劣等感とその確信への憤り、及び若さを失いつつある自身の肉体的魅力の喪失についての不安を絶えず内包している。

2. モリーにおけるトラウマ

モリーが一人よがりであり自己満足的、自己陶酔的であることは、彼女に固有の性格と思われる。これを、幼少時に彼女のもとを去った母親の遺棄による「精神的外傷」が彼女の人格形成に与えてきた影響に由るもの⁽²⁾、と解釈することも可能であろう。幼児期での母親の喪失、及び父親による養育は、英国守備隊少佐の娘として過ごしたジブラルタルにおいては、彼女に真似るべきモデルのないまゝに愛情の獲得を繰り返させ、また父親を始めとして男性を喜ばせるためにコケティッシュな態度を身につけさせた、と考えられる⁽³⁾。母親についてのわずかな言及が示唆するように、理由は語られないまゝに去って行った美しい魅惑的な母への淡い憧れは、無意識のうちにモリーの内部に刻印され、彼女を棄てた奔放な女への傾斜を強めていくのである。

ジブラルタルでの愛人マルヴィ中尉、英国人将校のガ

ドナー、現在の愛人ボイルン等、女性としてのアイデンティティを確認するためであるかのように「男性的な愛人」を求めてきたモリーが、ブルームとの結婚を選んだ理由は何なのであろうか。「母親似でユダヤ女に見える」モリーと母を思い出させるユダヤ人のブルームとが互いに惹かれ合うことは、ありうる理由の一つである。

一方、モリーの言動には矛盾が多く、これは作者ジョイスの女性観の反映と思われる⁽⁴⁾。例えばモリーは、

男たちには効き目の遅い毒を飲ませるべきだわ男たちの半分位はそれからお茶を持って来いとか両側にバターを塗ったトーストを持って来いとか生みたての卵が欲しいなどと言いたてる彼(ブルーム)にとつてはあたしなんかなんでもないのだわ… (635頁)

と男性への不満を堂々とのべる一方で、ブルームの作った朝食を彼にベッドへ運んで貰う。また好色な読み物『罪の甘さ』や化粧品を買って来るよう彼に頼り、午後には愛人と逢引するために一人にして貰う。ブルームは言わば子供の過大な要求を一手に引き受けてサービスする母親代り、世話人である。妻に甘い夫との関係において、幼児期に欠落していた母親との一体感、全ての要求が満たされる平穏な充実感をモリーが夫に求める構図が、そこに見えてくる。モリーはハウス岬での求愛の場面を思い出し、次のように述べる。

太陽はあなたのために輝くって彼が言ったわあたしたちがハウス岬のしゃくなげの花の間に横になっていた日に…どうしてあたしが彼を好きになったかといえれば彼は女がどういうものかを理解していたか又は感じていたのがわたしにはわかったからだわ… (643頁)

ブルームが母性愛と関連する献身的愛の人だということを、モリーは本能的に知っているのである。ボイルンが「桃とブドウ酒」という実際の贈り物でモリーにへつらう一方で、ブルームは熱い情熱の象徴である八本の満開のポピーを彼女に贈る(この挿話は句読点の無い八つの文から成り、横にした8は永遠＝無限を表わし、モリーの誕生日が九月八日であることは意味深い)。

モリーはこのように、「パイロン脚きどりの好男子」である女性的な優しい風貌と性質のブルームから母性的

配慮を望む一方で、スリルに富む攻撃的男性との関係に喜びを感じる、心身の分離に引き裂かれた女として提示されている。しかしながら、後者の要求に応じ、「見られる性」として彼を喜ばせるためには、常に不安と劣等感につきまといわれるのであり、モリーはステレオタイプとしての女を演じることへの苛立ちも感じている。そしてまた、「男ってどこでも自分の好みの女を拾い上げて選ぶことができる…男があたしを鎖につなごうとしたってできないわ」とモリーは、自由な女としての自己主張もしているのである。

モリーがボイルンを愛人としてもったのはごく最近であるにも拘らず、因襲的なものの見方から逃れられない彼女は、夫が秘密の情事をもっているかもしれない、という疑念を自から招くことにより、彼女自身の罪の意識を夫に対して投影するのであり、彼女の嫉妬心はこの章のライトモチーフとなっている。『オデュッセイ』ではユリシーズが妻への求婚者たちを次々と殺す一方で、現代のペネロピは夫の関心を惹いたと思われる女性たちを、滑稽なレトリックを用いて一人ずつ心の中で退ける。例えば、じゃがいもと牡蠣を盗み、ブルームから靴下留めを貰ったという理由で女中のメアリィ・ドリスコルを解雇する。また「あたしたちが政治問題で喧嘩の立まわりをした」のも、もとはと言えば、ブルームのかつての恋人グリーン夫人が原因であり、彼女に対するブルームの以前の興味が再燃することを心配するモリーは、様々な戦術を考える。

あたしは手管を沢山知ってるわあたしのブラウスの
衿を折り曲げてくれるよう頼んだり出掛ける時ヴェール
や手袋をして彼に触れるとかキスを一つでもして
やればどんなにちゃんとした人だって男はみんなぐ
にやぐにやになってしまうわ… (612頁)

この挿話を通して、ブルームの関心を惹きつけるためのモリーの手管は、さゝやかなものから挑発的な性的刺激に迄及んでおり、それらは後にブルームとの関係の再構築へ向かう際にも、モリーが用いる得意な戦術である。

3. 「ハウスの丘」への回帰

ブルームは生後十一日目で亡くなった息子ルーディに代わって精神的息子とみなすスティーヴン・ディーダラスを、モリーの現在の愛人から彼女の関心を逸らすため

の代理として提供することを考える。第十七挿話においてブルームがスティーヴンに見せる妻の写真は、胸が露わな夜会服に豊満な肉体を包んだ女盛りの魅惑的なものであり、その行為は求愛者を退けるための『オデュッセイ』に対応する心理的戦略となる。

モリーは夫の行為に疑惑を抱き、「彼はあの写真にあたしを添えて彼に贈り物をしたんじゃないかしら」と皮肉なコメントを述べるにも拘らず、「結局それでも構わないわ」と進んでその戦略に参加する。スティーヴンを自己の幻想の世界へ取り込み、その幻想が気儘な一人歩きをしていくのである。父親のサイモン・ディーダラスによれば、「もの書きでイタリア語の大学教授になろうとしている」スティーヴンと知り合いになりたいと思うモリーは、彼が二十代の成熟した若者に違いないので、自分に不似合いな相手ではないと確信し、また詩作へのイメージーションを掻き立てる「詩神」としての役割をする自身の姿を想像して自己満足に浸る。モリーのスティーヴンへの関心は主として、「マーゲイト海岸の海水浴場で岩陰から見たあの立派な若者たち神様か何かのように素っ裸で日射しを浴びて立ったり海に飛び込んだり」と表現されるように、若々しい、強く引き締まった肉体の持ち主としての彼にある。またスティーヴンは、ロマンティックなモリーが一日中眺め、「本当の美と詩」を感じ、愛でることのできる小さなナースサスの立像に喩えられる。拡大、増幅されていく幻想の中で幸福感を増していくモリーは、次のように述べる。

できるだけ読んで勉強するわ…あたしを馬鹿だと思
わないようにもし彼が女は皆同じだと思っているの
ならそうではないことも教えてあげましょう彼があ
たしの下で中ば気を失う程すっかり感じさせてあげ
るわすると彼はあたしのことを詩に書くでしょう恋
人愛人として公けに二枚の写真が全ての新聞に載る
わ彼が有名になる時は… (638頁)

そのような学習方法がスティーヴンを感銘させることはとてもあり得ず、それはモリーの自己陶酔的幻想の滑稽な一例となっている。

幸福感に浸りながらモリーは突然ボイルンの存在に気付き、「あら、でもその時あたしはもう一人の方をどうしようかしら」と述べ、驚きと困惑を隠さなさい。名声と公けにされる二人のスクandalについての空想はモ

リーの心を動かさずにはおかず、ブルームとの退屈な日常生活からモリーを解放する刺激的な物語である。その時迄にはモリーはボイルンを、「詩とキャベツの区別も知らない」粗野な愚か者として退ける用意ができていたのだ。モリーはボイルンのような自己中心的な男は彼女が求める情緒的満足を決して与えてくれることはないという悟るのであり、こゝにおいてモリーの性愛における「強迫観念の崩壊」が生じ、その引金となるのはスティーヴンである。若き愛人としてのスティーヴンについての幻想を楽しむ一方で、モリーは母を失った彼に母のない娘であった彼女自身の姿を重ね合せ、同情を寄せる。

あたしには面倒をみてくれるお母さんがなかった彼は書物も勉強も放りっぱなしにして夜うろつきまわっているんだと思うわそれに家がいつもごたごたしているという理由で家族と離れて暮らして可哀想だわ…あたしには息子が無いわ… (640頁)

モリーが記憶するスティーヴンは、「無邪気な少年で小公子フォントロイが着るような服を着て芝居の中の王子様のような巻き毛をした可愛らしい子供」であった。その時彼は十一歳であり、もし生きていれば十一歳になっている息子ルーディをモリーは思い出す。現代のベネロピィにふさわしく、幼な児のために泣きながら編んだジャケットをルーディに装着して葬ったのであり、彼女はスティーヴンをルーディに結びつける。そしてモリーは二階の空いている部屋で勉強し、女主人にイタリア語を教え、彼女からスペイン語（及び性の手ほどき）を習い、彼女（又はブルーム）の用意する朝食をベッドで食べ、大事にされる家族の一員としてのスティーヴンの姿を想像するのであり、母の無い彼の世話人、母親代わりとしての自分の姿を予想して楽しむ。

スティーヴンについての幻想に続いて間もなく、モリーのモノローグは対象をブルームへ変え、「彼にもう一度チャンスを与えてあげよう朝は早く起きよう」と述べる。『オデュッセイ』においてテレマカスが父親を連れて来るように、養子の息子としてのスティーヴンはモリーに夫ブルームを結びつける。スティーヴンはモリーを愛人ボイルンから逸らし、彼女の想像的エネルギーをブルームへ再び集中させる媒介者として、重要な役割を果たすのである。

モリーはブルームを性的微睡みから覚醒させ、彼女へ

の関心を再燃させるために様々な手管を空想し、戦術を練る。ベッドに横たわるモリーの想念においては無意識のうちにマルヴィ中尉とブルームが、ジブラルタルの岩とハウスの丘が合体する。

彼はムーア人の城壁の下であんなに強くあたしにキスしたわそしてあたしは彼がどんな男よりも素晴らしいと思ったわ…それから彼はもしあたしが承知ならえ…って言うておくれわたしの山の花よって頼んだわ…彼の心臓は狂ったように鼓動していたのよそしてそうよあたしえ…って言ったわい…わってそうよ (643-644頁)

連綿と続く花の連想の中で、二人が横たわるハウスの丘は地上の楽園となり、そしてモリー自身が咲き乱れる山の花となって、自身が花であるブルームと一体になる。この叙情性溢れる最終頁において、モリーの想像力は時間と空間を越えて、新たな世界の再創造へと向かっている。

思いやりがあり、ソーダン夫人のような老夫婦に対しても親切であり、愛情細やかな世話をする母性的資質をもつ男性であるブルームは、モリーにとつてどの男性よりも素晴らしく、また幼児期に拒絶された母親の心理的代理となりうるのである。

ハウスの丘でモリーが口に含んだ種菓子^{シードケーキ}をブルームの口へ与える行為は意味深い。豊かな受容性をもつ母性的男性に滋養物を与えるこの行為は、モリーの幼児期に欠落していた母子間の相互的愛の関係の再現であり、それには男らしさを蘇生させ、次に男性からの贈り物としての種子を両者の結合の成就において女性が受け取る、という意味合いがこめられており⁶⁾、両者相互の豊饒性を意図したものと解釈されうであろう。そしてモリーはブルームとの関係において、言い換えれば彼女の根源的欲望を満たすための媒介者としてのブルームを通して、母性としての主体的位置を再構築することを学ぶものと思われる。

ジョイスはこの挿話を『ユリシーズ』における「欠くことのできない応答信号である」⁶⁾と述べている。「完全無欠な万能の男」⁷⁾、とジョイスがみなしたユリシーズの体現者であるブルームに対して、モリーはいかにも矛盾に満ち、多くの欠陥を抱えた女である。ブルームが

「時間」に、モリーが「場所」に結びつくのみならず、ブルームの「太陽」中心的な見方に対し、モリーは「地球」中心的な見方をしている。また先行する十七の挿話がブルームやステイーヴンを中心とする男性支配の世界、及び「ジョイスが知っていた文化の性的貧困の世界」⁽⁸⁾であるのに対し、この挿話においてはモリーの世界観は女性を中心であり、欲望する主体としてのモリーの豊かな性愛が謳歌されている。ジョイスはフランク・バジェンに宛てた手紙の中で、この挿話について、「恐らく先行するどの挿話よりも猥褻であろうが、それは私には、完全に正気で豊かな超道徳的な受胎可能な当てにならない魅力ある抜け目のない偏狭で細心な無関心な女であると思われる。」⁽⁹⁾と、述べている。モリーはジョイスにとっての、女性性の真髓なるものの体现者である、というであろう。

常に肯定する肉体⁽¹⁰⁾であるモリーの陳述は、時の隔たりによる記憶の混乱があるとはいえ、多くの否定、矛盾、不合理を含んでおり、彼女の知っている多くの男性は代名詞「彼」で呼ばれる。また言葉の反逆性とは裏腹に、彼女の半生の歴史は極めて因襲的でもあるが、むしろそれらがモリーを興味ある喜劇的像にしていると言えるであろう。同時に、彼女の不満、嫉妬、欲望といった様々な情念を通して、性的ステレオタイプに対する作者の嘲笑が聞こえてくるのであり、それは文化に刻印された男女の力関係に対するジョイスの意識的な姿勢を示していると思われる。

モリーについてはイヴ、^{グー・チル・ス}大地の女神といった神話的、原型的解釈から、ダブリンの主婦、娼婦、アナ・リヴィア・ブルーラベルの原型的先駆者に至る迄、広範な解釈がなされてきたが、それらを内包した変容可能な複合的存在として理解できるであろう。ロマンティックであり、平凡でもある女モリーは、多くの矛盾を孕みながら鋭い叡知をもつのであり、二十世紀文学における複雑な人間像の一つを体现していると言えるのではないだろうか。

註

Text: James Joyce, *Ulysses* (1922; rpt. Penguin Books, Corrected Edition, 1986) 尚、本文中の引用は拙訳である。

- 1) リチャード・エルマン、和田旦、加藤弘和訳、『リフィー河畔のユリシーズ』（東京；国文社、1985）p.239.
- 2) Suzette A. Henke, *James Joyce and the Politics of Desire*, (New York and London: Routledge, 1990), p.128.
- 3) Brenda Maddox は *Nora: The Real Life of Molly Bloom* (Boston: Houghton Mifflin, 1988) の中で、ジブラルタルにおけるモリーの幼年時代と、少女の頃 Galway に住む母方の祖母のもとへ里子に出され、母親との絆を断ってしまったジョイスの妻ノラとの相関々係を描いている (p.12). Maddox は、ノラとモリーにとって、「母の喪失がコケティッシュな態度をとらせることになった…ノラがジョイスにおいて見た母性的資質は、モリーがブルームにおいて見たものと同じである」(p.203) と述べている。
- 4) Elaine Unkeless, "The Conventional Molly Bloom" in Suzette Henke and Elaine Unkeless eds., *Women in Joyce* (Urbana Chicago London: University of Illinois Press 1982), p. 155.
- 5) Henke, *op cit.*, p.161.
- 6) Stuart Gilbert ed., *Letters of James Joyce* vol. 1, (New York: The Viking Press, 1966), p.160.
- 7) Frank Budgen, *James Joyce and the Making of Ulysses* (Bloomington and London: Indiana University Press, 1960), p.17.
- 8) Bonnie Kime Scott, *Joyce and Feminism* (Bloomington: Indiana University Press, 1984), p.169.
- 9) 10) *Letters of James Joyce, op. cit.*, p. 170.